

活動報告書

報告者氏名： 朝倉由里乃

所属： 香川県立高松養護学校

記録日：平成26年2月27日

【対象児の情報】

○学年 小学2年生女子

○障害名 肢体不自由（脳性まひ）、知的障害

○障害と困難の内容や背景

- ① 児童は発語はないが、普段は指さしやジェスチャーを組み合わせで伝えようとしている。
- ② 保護者が忙しく、話す機会が少ないため、対象児の家庭での様子を知ることが難しい。
児童は急に泣く場面やイライラして友達を噛んだり、ひっかいたりすることがある。

【活動目的】

○当初のねらい

- ① たくさんある対象児のジェスチャーを整理したい。
ジェスチャーを整理した後、共有できるようにしたい。
- ② なるべく保護者の負担が少ない方法で、家庭での様子を知ることができるようになりたい。
児童が泣く場面やイライラしている場面を減らしたい。

○実施期間 平成25年5月～平成26年1月

○実施者 報告者、学級担任3名、保護者、放課後支援サービスの職員

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

保護者と連絡を取り合う手段は「連絡帳」だが、保護者は、毎日読んでくれているものの、返事を書くことは難しい様子である。児童は福祉事業所を利用しているが、福祉事業所で使用している連絡帳は福祉事業所と保護者のみのやりとりになってしまうため、福祉事業所での児童の様子を担当が知ることは難しい。急に泣いたり、友達に手を出したりするが、教員はその理由がわからないことが多い。また、どのような場面で起こるのかという予測もつきにくい。

○活動の具体的内容

- ① 児童のコミュニケーションの実態を把握するために、コミュニケーションサンプルをとった。たくさんある児童のジェスチャーを整理するために、「ジェスチャー観察シート」を作成し、担任で記入した。

ジェスチャー	意味
	1. うつろこー
	2. ごちそうさま
	いただきます

「ジェスチャー観察シート」記入例

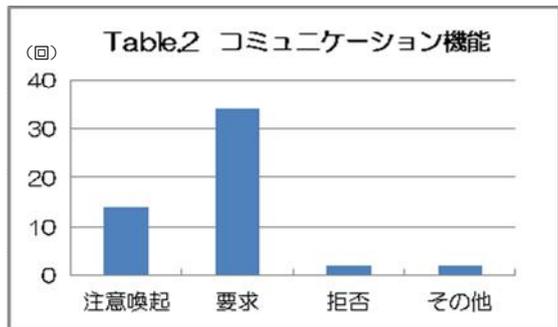
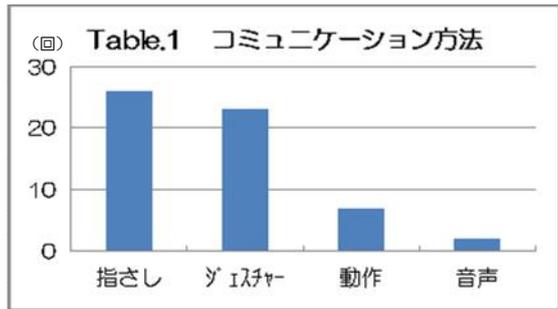
- ② 保護者が「伝えたい」と感じたときに時間を問わず投稿でき、投稿の方法も複雑でない方がよいと考え、SNSアプリ「Twitter」を使用し、担任2名、保護者、放課後支援サービス職員間で児童の情報を共有できるようにした。児童の情報が、外部に漏れないようにプライバシー設定で、公開範囲を限定した。

○活動の結果

- ① Table.1、Table2 は5月時点での児童のコミュニケーションの様子である。児童が伝えようとするときは、教員が児童と目が合ったときにジェスチャーや指さしを中心にして要求をするので、注意喚起が少ない。また、伝えようと思っても教員が気がついていない時には、相手を指さして呼ぼうとしているが、音声がなかったので相手に気がついてもらえない場面が度々見られた。

対象児の担任4名の教員に記入してもらったジェスチャー観察シートの結果を、使用している体の部位ごとに分類した。分類は3名の教員で行い、観察した4名の教員が共通理解しているジェスチャーを4点、4名のうち3名が理解しているものを3点、2名のものを2点、1人だけがそう受けとっているジェスチャーを1点として分類をした。その結果、Fig.1 のようになった。ジェスチャーシートに記入されているものの中には、ジェスチャーとは認められないものもあり、分類をしていく中で、除外していった。対象児のジェスチャーは、一つの動きで複数の意味をもつものが多く、教員は、対象者のジェスチャーの組み合わせ方によって、対象児の伝えたいことを理解しているようである。

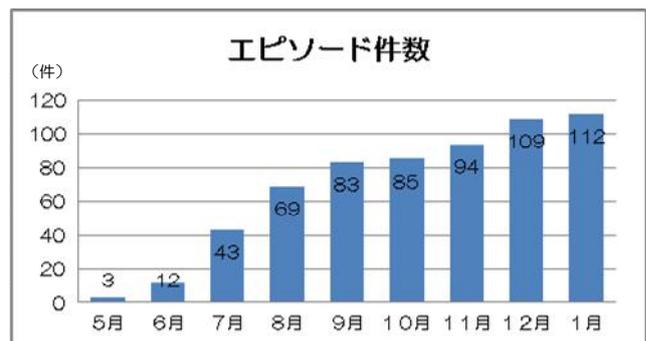
ジェスチャーの意味は、児童の好きな歌の曲名を意味しているものが多かった。



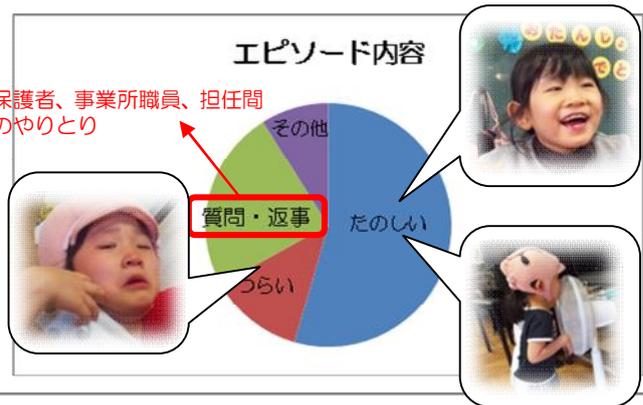
	4点	3点	2点	1点
項目	ジェスチャー観察シートの結果			
目周辺	2	1	1	0
耳	0	0	0	1
鼻	0	0	1	0
口・頬	1	1	1	2
肩	0	0	1	0
胸・腹	0	1	1	2
手	3	3	2	0
総合	6	8	7	6

各得点の総合点にばらつきが見られないということが分かる。このことは、普段使っているジェスチャーが児童の創意工夫によって作られていることと関係していると考えられる。教員にとっても対応は必然的にばらついてしまうということが明らかになったと考えることができるだろう。

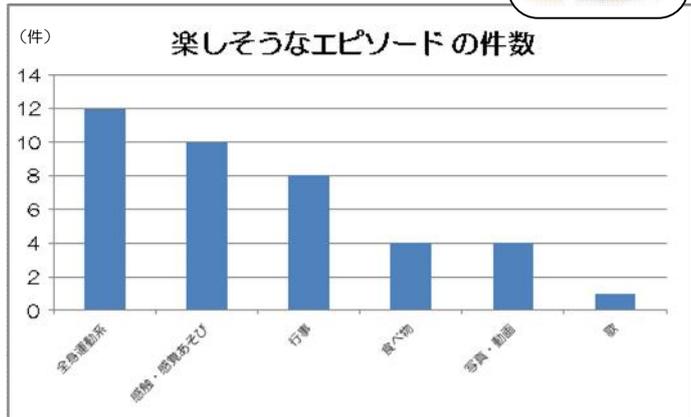
- ① 5月下旬からの開始以降、全体で112件の投稿があった。今までの連絡帳に書き込むことが難しかった保護者からも30件近くの投稿があった。



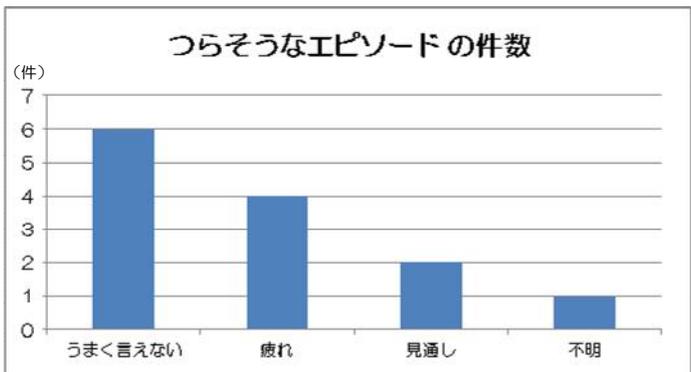
投稿内容としては、学校、家庭、支援サービスでの様子の投稿がほとんどを占めていた。他には、保護者が悩みごとをアップして、担任がアドバイスをしたり、1件の投稿に対し、メンバーが返事をしたりするなどの、今までの連絡帳ではできなかった、保護者、事業所職員、担任間でのやりとりが見られた。



投稿されたものの中で、児童が楽しそうだなと感じるエピソードには、学校でトランポリンをした様子、事業所でプールをした様子、散歩に行った様子などが多く書かれていた。また、土あそびや落花生を触って楽しむ様子など、感触・感覚あそびに関する投稿も多かった。



投稿されたものの中には、件数は少なかったものの、児童がつまらなそうだなと感じるエピソードも投稿されていた。その中でも特に多く寄せられていた投稿は、自分のしたいことや気持ちを「うまく言えない」時に、児童が泣いたり噛んだりしてしまったエピソードであった。また、「どうして泣いているのかわからないが、しばらくすると気持ちがかわりにここにしていた」という泣いた原因がわからない、という状況もあった。



- ① 児童のもつジェスチャーは1つの動きで複数の意味を持つものが多く、児童が「伝わった！」とわかると新しいジェスチャーとしてどんどん追加され続けている。②と比較すると、児童にとってたのしい活動は、全身運動系や感触・感覚あそびが多かったが、それを表すジェスチャーはほとんどなかった。児童がやりたい活動をしっかりと相手に伝える手段を身に付けることができれば、児童が急に泣きだすことや噛むことが減少するかもしれない。
- ② 今までの連絡帳ではなかった保護者からの情報発信があり、家庭、事業所、学校間の児童に関する情報のやりとりが見られるようになった。今までは、保護者と担任、保護者と事業所というバラバラに共有されていた児童の情報が1つの場所に集まったことで、今後児童と関わる支援者にもTwitterに参加してもらうようにすれば、情報共有が簡単になると考える。Twitterでのやりとりは、普段の文字だけの連絡帳とは違い、児童の様子と一緒に写真がついていたので、見るのが楽しく、保護者自身も投稿しようと思えるきっかけになったようである。また、保護者が

投稿すると、担任からの返事が比較的短時間で返ってくることも、保護者にとって投稿することの楽しみの一つだったようだ。

○考察

SNS を連絡帳として活用することで、今までの方法よりも児童の情報を共有できた。その背景として、SNS がもつ2つの特徴があると考ええる。1つ目は、「いつでも、どこでも見れる」という気軽さがあるということである。それは、保護者の負担軽減につながったと考える。2つ目は、文字だけではなく写真も投稿できるということである。そのことで、保護者も事業所職員も楽しみながら情報共有できたのではないかと感じている。

今回の取り組みの当初の大きな目的は、以前よく見られていた児童が急に泣きだす場面や友達を噛んだりひっかいたりする場面の原因をさぐれば・・・ということであった。この目的に対して、「①ジェスチャー観察シート」と「②SNS を用いた情報共有」の2つの実践からアプローチを試みたことで、児童のコミュニケーションの実態把握が進み、今後の指導目標が見えてきたと考えている。

見えてきた実態把握は2つある。1つ目は、「周りの支援者のジェスチャーの理解度は様々であり、支援者間で共有されているジェスチャーは全体の半数程度しかないということ」、2つ目は、「SNS で共有された楽しそうな活動を児童自ら表現するジェスチャーがほとんどない」ということである。そのことから、本当に児童が伝えたいことは伝わっているのか？という疑問をもった。今後は、児童が自分がしたいことを誰にでも伝えられる方法を身につけることができるように、また、嫌なことやつらいことがあった時に、噛むやひっかくななどの不適切行動ではなく、周りの人に助けを求めたり、自分で回避できたりするような方法を身につけることができるように指導をしていきたい。

今回の実践をふりかえって、こんなこともできるのでは、と感じる点が2つある。1つ目は、ただ情報を集めるためだけに SNS を使用するのではなく、目的をもって集まった情報を整理することの大切さである。SNS のよいところは、ひとつの場所に児童の情報が集まるところも考えられる。今回は、投稿するエピソードに関して特に決まりごとを設けなかったが、特定の活動を継続して撮影し続けることで、その児童の成長の過程を確認でき、より目的をもって情報共有できるようになるかもしれない。2つ目は、「ジェスチャー観察シート」の活用の仕方についてである。「ジェスチャー観察シート」は4点に分けて評価を行った。そのため、4点、3点の高得点グループと、2点、1点の低得点グループに分けて分析することができたのではないかと、ということである。高得点グループの傾向を探れば、支援者間で共有されているジェスチャーの特徴が見えてくるかもしれない。低得点グループの傾向を探れば、児童がどのようにジェスチャーを増やしていこうとしているかの特徴が見えてくるかもしれない。今後の児童に対する支援方法として考えていきたい。